



芽室町産の農畜産物を使った料理が並んだ試食・商談会

【東京】J Aめむろ（辻勇組合長）は19日、東京都渋谷区恵比寿の飲食店で、首都圏の飲食店の経営者や調理担当者に地元産食材を提案する初の試食・商談会「十勝めむろ Presents（プレゼンツ）」を行った。

同J Aは「十勝めむろ」のブランド化を進める中で、地域の農業・農畜産物を全国の消費者に知ってもらい取り組みを展開している。今回は大消費地の東京で芽室町の風土や歴史、生産物のストーリー、生産方法（栽培技術）などを発信し、飲食店が抱える食材調達の課題解決を図るための意見交換を目的に企画した。

この日は9店12人が参加し、ジャガイモや枝豆、町内産牛肉「十勝めむろうし」、町内産小麦「ゆめちから」100%の「北のゆめパスタ」などを使った料理を味わった。

都内などで串焼きチェーン店を営む「サンクチュアリ」の大金剛専務（30）は「枝豆の冷製スープがおいしかった。できれば、調理していない野菜など素材そのものの味も知りたかった」と話した。

## J A帯広かわにし メーカーJ Aめむろで選別

2015年9月30日

### 知名度の高い芽室ブランドで出荷

【帯広・芽室】J A帯広かわにし（有塚利宣組合長）は、試験的に今年の川西産メーカーの全量をJ Aめむろ（辻勇組合長）で選別し、地域団体商標に登録している「めむろメーカー」と冠して出荷する。ジャガイモの選別施設が老朽化した川西が協力を求め、めむろメーカーの販路拡大につながるとして芽室が了承した。

川西では、築20年以上経過した選別施設が老朽化し、新設するにはコストが掛かる。農家57戸がメーカーを栽培、約2000トンの収穫を見込む。めむろメーカーは年間約8700トンを生産。川西側は「芽室のブランドとして扱ってもらうことでネームバリューの小ささを解消し、農家の手取り増につなげたい」（青果部）との思いがあった。

芽室側も「ジャガイモの品種の中でもメーカーの知名度は高く、需要も大きい」（笹島三樹裕常務）とし、川西独自の販路先が加わることを利点と捉え、要請に応じた。

めむろメーカーは2011年に「めむろごぼう」とともに、地域のブランド力向上を図る特許庁の同商標制度に登録。生産地域を「芽室町及びその近隣地域」としている。両J Aは「十勝川西長いも」の生産や、川西産のゴボウをめむろごぼうの名で出荷するなど協力している実績がある。

川西産は10月下旬から随時、川西の倉庫から芽室の施設に運んで選別する予定。両J Aは販路拡大に伴う施設の稼働状況の変化など今年の実績を見極めたい考えた。

## 研修酪農場に着工 事業費17億円 来春稼働へ 新得・シントクアユミルク

2015年9月30日



くわ入れで工事の安全を祈願する太田組合長

【新得】酪農の新規参入者や従業員の育成を目的とした研修農場となる農業生産法人シントクアユミルク（社長・太田真弘 J A新得町組合長）のフリーストール牛舎などの施設建設に関わる地鎮祭が、30日午前11時から、新得町上佐幌東1線77の農場開設地で行われた。来年4月の稼働を目指しており、最先端技術を導

入して経産牛500頭を飼養し、酪農の担い手確保と最先端技術の実証実践による既存農場の経営基盤強化を図る。

同法人は、J A新得町、町内の5つの農業法人、運送会社2社などが出資して昨年12月に設立。個人農家から畑4.7ヘクタールを購入し、研修農場開設の準備を進めてきた。資本金は9800万円。従業員は牧場長を含めて7人で、うち研修生は3人を予定。総事業費は約17億5000万円。国の畜産競争力強化緊急整備事業の補助約6億2800万円を受けるほか、乳牛500頭の導入資金3億円は町が今年度と来年度の2カ年に分けて貸し付ける。

建設する施設は搾乳ロボット7台を備えたフリーストール牛舎、哺育舎、育成舎、乾乳舎、飼料保管庫、堆肥舎、事務所棟などで、年間5000トンの生乳出荷を目指